

訳語によって起る新約聖書用語 の屈折について(2)

加 藤 邦 雄

引 用 文 献 略 記

本文中にしばしば引用する文献を略記するが、これ以外の文献については引用の都度明記したい。

1. SyrThe New Testament in Syriac.
2. DelDelitsch's Hebrew New Testament.
3. JennJennings, Lexicon to The Syriac New Testament.
4. SmithSmith, A Compendious Syriac Dictionary.
5. ChalLevy, Chaldaeisches Woerterbuch.
6. Talm-MidrLevy, Woerterbuch ueber die Talmudim und Midraschim.
7. GesGesenius, Hebraeisches und Aramaeisches Handwoerterbuch.
8. KoehlKoehler-Baumgartner, Lexicon in Veteris Testamenti Libros.
9. ThWNTKittel, Theologisches Woerterbuch zum Neuen Testament.
10. HatchHatch-Redpath, Concordance to the Septuagint.
11. LinswskyLinswsky, Konkordanz zum Hebraeischen Alten Testament.
12. LiddellLiddell-Scott, Greek English Dictionary.
13. LewisLewis, A Latin Dictionary.
14. OxfordThe Shorter Oxford English Dictionary.
15. KlugeKluge, Etymologisches Woerterbuch.
16. DauzatDauzat-Dubois-Mitterand, Nouveau Dictionnaire Étymologique.
17. Concord SBConcordantiarum Scriptorum Biblicum.
18. VulgBiblia Sacra (Vulgata).
19. LutherLuthers Bibel.
20. MengeDie Heilige Schrift uebersetzt von Menge.
21. ZuercherZuercherbibel.
22. AVThe Authorized Version.
23. RSVThe Revised Standard Version.

24. NEBThe New English Bible.
 25. TEVTo-day's English Version.
 26. JérusalemLa Sainte Bible traduite en française sous la direction de
 L'École Biblique de Jérusalem.
 27. CramponLa Sainte Bible du Chanoine Crampon (Nouvel édition
 1960)
 28. LXXThe Septuaginta

EIRĒNĒ

使徒行伝10章36に、口語訳によると、「平和の福音を宣べ伝え」なる句がある。それはギリシャ語原典においては、euangelizomenos eirēnē であるので、日本語にまだなっていないまったく生硬な文字で直訳するならば、「平和を福音する」とでも言うような表現になるべきであって、「平和」なる名詞と「福音」とが結びつけられているのではなくて、「福音」は動詞であり、「平和」は名詞である。この場合、福音として伝えられる内容は平和である。

ギリシャ語の平和は eirēnē であるが、新約聖書ギリシャ語辞典によると⁽¹⁾、その語は LXX においては、主としてヒブル語の shalom のギリシャ語訳であるとされている。

1. Thayer, Greek-English Lexicon of The New Testament. Abbott-Smith, Manual Greek Lexicon of The New Testament.

しかし、ヒブル語の shalom がそのままギリシャ語の eirēnē に相当するとまったく機械的に理解することはできない。

LXX における eirēnē は単に shalom の訳であるのみならず、shalom 以外には次のようなヒブル語のギリシャ語訳でもある。そのことは Hatch の Concordance が示すとおりである。

- betah⁽¹⁾ Jb 11 : 18. Pr 3 : 23 ? Is 14 : 30. Ez 34 : 27. 38 : 8. 11. 14. 39 : 26.
 halak II K 8 : 24 ?
 leqah Is 29 : 24 ?
 tsaḥ Is 22 : 4 ?
 shal^evah Pr 17 : 1.
 shaqat I Ch 4 : 40.
 sh^elam II Es 4 : 7. 17. 5 : 7.

Da LXX 3 : 31 (98)

Da Th 3 : 31 (98)

shalem Ps 75 (76) : 2 ?

1. h はドイツ語 ch と同じ音を示して h と区別したい。

しかし、ここでは eirēnē を shalom との関係だけに限定し、eirēnē と訳されたほかのヒブル語についての検討は今回はしないことにする。

ヒブル語の shalom は shalam なる動詞に一応由来するものと考えるが、shalam は Gesenius によると、その第一義は unversehrt, wohlbehalten sein であり、それが第二義として vollständig, vollendet sein の意味となり、最後に Frieden halten, freundlich m. jem. verkehren の意味に用いられた、とされる。shalom なる名詞としても同様に、その第一義は Unversehrtsein, Heilsein, Wohlbefinden であって、人と人とが会ったときにかわす挨拶に必ず用いられた。Gen 29 : 6. II Sam 18 : 30. II Kön 4 : 26. その第二義は ungestörtes Verhältnis zw. versch. Personen, で Freundschaftsverhältnis をあらわす。Jer 20 : 10. Ps 41 : 10. その第三義はほかの語と組み合せられた用法として挙げられる。

もし、shalom すなわち eirēnē と理解するならば、第一義の用法がまったく無視されることになる。eirēnē の意味については後にいささか詳細に論ずるが、それは戦争のない状態あるいは戦争を講和によって終結することを意味するので、それは戦争と言う積極的状态に対しては消極的 negative な状態を意味する。しかし、shalom は元来「完全であること」または努力として「成就されること」その結果、生が充実され、歴史が創造される、と言うようなきわめて積極的内容がいつも示される。それ故にイザヤ書45章7で、shalom は ra (わざわい) の反対語として用いられていて、口語訳では shalom をこの場合「平和」と訳さないで「繁栄」と特に訳している。そのような例を Gesenius は Heil とか Glück と訳した。Pr 3 : 2. Jes 26 : 3. 32 : 17. それ故に shalom は tsedaqah (Jes 48 : 18. 60 : 17. Ps 72 : 3) や kabod (Ps 66 : 12) や emeth (II K 20 : 19. Jesr 33 : 6) などと組み合せられて用いられている。

shalom なる語は Köhler によると旧約聖書に 236 回用いられていることになるが、口語訳はそれを以下のように30以上の邦語に訳した。すなわち、あいさつ、安心、安全、安泰、安否、うまくゆく、おだやかに、勝つ、変ったこと、好意、幸福、ことごとく、栄える、親しい、親しい友、勝利、健

か、善、太平、つつがなく、どうしているか、繁栄、無事、平安、平和、むつまじい、安らか、安んじる、よろしい、やわらぎ、和、和解、である。

口語訳は、ヨーロッパ語の諸訳と相違する特長をはっきりと示している。それは、ヨーロッパ語であれば、*eirēnē*, *pax*, *Friede*, *paix*, *peace* の一語であらわすところを、翻訳者がこれに解釈を加えて、それを「平和」と「平安」とに区別したことである。その一つ一つの例にあたってみると、「平和」と「平安」とは明白に区別できないようにも考えられるが、とにかく、平和と平安とを区別している。しかも、平安が49回（創世41：16. 民数6：26. 申命23：6. 29：19. 士師6：24. 【サム25：6. Ⅱサム18：28. 29. 【王2：33. 5：4. Ⅱ王9：17. 18. 【代12：18. 22：9b. Ⅱ代15：5. エズ9：12. 詩29：11. 119：165. 120：6. 122：6. 125：5. 箴3：2. 17. イザ26：3. 48：18. 22. 53：5. 54：10. 57：2. 21. エレ6：14. 8：11. 11. 11. 8：15. 14：13. 16：5. 23：17. 7. 11. 30：5. エゼク7：25. ミカ3：5. ナホ1：15. 2：1. マラ2：5. 6）であるのに対して、平和は36回（レビ26：6. 民数25：12. 申命2：26. 士師21：13. 【サム7：14. 【王5：12. Ⅱ王20：19. エス9：30. 10：3. ヨブ25：2. 詩35：20. 72：3. 7. 85：8. 10. 雅8：10. イザ9：6. 9：7. 26：12. 32：17. 33：7. 52：7. 59：8. 60：17. エレ25：37. 28：9. 哀歌3：17. エゼ13：10. 16. 34：25. ミカ5：5. ゼカ6：13. 8：12. 16. 19. 9：10）である。このことは、邦訳聖書が、聖書を具体的に解釈するよりも、ある程度まで精神的に、内面的に、努めて解釈しようとする日本の精神史の伝統に影響されたと見るべきであろう。

shalom を、その本来の意味にしたがって繁栄（ヨブ15：21. 詩37：11. イザ45：7. 66：12. エレ33：6. 33：9. ハガ2：9）. 栄える（詩73：7. イザ54：13）. 幸福（詩35：27. イザ38：17）. 健やか（詩38：3）. 勝つ（士師11：31）. 勝利（【王22：27. 28. Ⅱ代18：26. 27）などと口語訳が訳している個所は以上のようなものであるが、十数回にすぎない。これに「あいさつ」と訳した個所（【サム10：4. 25：5. Ⅱサム8：10. 【代18：10などを加えても二十回位にしかない。

shalom を大体において、「平和」とか「平安」と訳す伝統は一体いつごろから始ったかについて歴史的に検討する必要がある。それについては第一に、ヒブル語旧約聖書が紀元少し前にギリシャ語に訳されて LXX になったことから検討し、次に、新約聖書がギリシャ語で書かれ、それがさらに紀

元 400 年ごろにラテン訳 (Vulgata) に訳された場合、その用法を検討せねばならぬ。

shalom は LXX において次のようなギリシャ語に訳された。

aspazesthai (こころよく迎える) 2 回

Ex 18 : 17. Jud 18 : 15.

euthēnein (栄える) 1 回

Jb 21 : 9. 口語訳は「安らか」と訳した。

pōs echete 1 回

Gen 43 : 27. 「無事ですか」と訳した。

hileōs (好意をもって) 1 回

Gen 43 : 23. 「安心なさい」と訳した。

hosios (聖別された) 1 回

Deut 29 : 19. (18.) 「平安がある」と訳した。

sōtēria (救) 3 回

Gen 26 : 31. 28 : 21. 44 : 17.

sōtērion (救) 1 回

Gen 41 : 16.

teleios (完全な)

Jer 13 : 19.

hygiainein (健かである) 10 回

Gen 29 : 66. 37 : 14. 43 : 27. 28. Ex 4 : 18. I K 25 : 6. 6. II K 14 : 8.

Da LXX 10 : 19.

hygiēs (健康, 健全) 1 回

Jo 10 : 21.

philos (親しい) 1 回

Jer 20 : 10.

chairein (あいさつする) 2 回

Is 48 : 22. 57 : 21.

eirēnē 176 回位

eirēnikos 12 回

Gen 37 : 4. Deut 2 : 26. 20 : 10. 23 : 6(7). Ps 34(35) : 20. 36(37) : 37.

119(120) : 7. Ob 1 : 7. Zach 6 : 13. 8 : 16. Jer 9 : 8(7). 45(38) : 22.

以上を合計すると、もし筆者の算え方に間違いがないとすれば——その個

所を完全に拾うことは簡単のように見えて、実は10パーセント位はいつも落していることが多いほど困難である——shalom は二百十数回用いられていることになる。その中で eirēnē および eirēnikos を除くと、比較的多く用いられているのは hygiainein 10回と sōtēria 3回とである。hygiainein はすでに述べたように、「健かである」ことであり、sōtēria は救いである。この点のみを取り上げると、ヒブル語で普通「生きる」と訳される語 ḥayah とよく似た意味を共通にもっていることが判る。すなわち、ḥayah は単に「生きる」ことであるのみならず、「生かされる」こと、すなわち「救われる」ことであるからである。

LXX と必ずしも直接の関係はないが、邦訳には甚大な関係をもっている AV によって shalom の訳語を調べて見ると、もし筆者の拾い方に大きな誤りがないとすれば、その結果は次のようであるので、LXX における shalom のギリシャ語訳と比較して見るとなんらかの参考になるであろう。

旧約聖書に shalom が大体 220 回位あるとして、AV は次のように訳した。

peace	179回位	
well	14回	} 22回
welfare	5回	
health	2回	
fare	1回	
prosperity	4回	} 6回
prosper	1回	
prosperous	1回	
safe	3回	} 4回
safely	1回	
salute	3回	
familiar	1回	
favour	1回	
friend	1回	
wholly	1回	
rest	1回	

LXX で eirēnē は約 176 回、eirēnikos が12回でこれを合計すると 188 回になる。sōtēria と sōtērion とを合計すると 4 回である。LXX の訳し方と

AV の訳し方とが完全に一致しているわけではないが、shalom 全体の中で、peace とか *eirēnē* とか訳されている比率が大同小異であることに注意を払いたい。と言うことは、本来「完全」とか「健全」とか「繁栄」とか、言うような内容を相当程度含んでいたヒブル語の shalom が、すでに LXX でギリシャ語に訳されたとき大体において *eirēnē* と訳されたことは、全面的に不当ではないにしても、それは少なくともきわめて一面的な解釈でしかなかった、と言うことになる。

shalom はアラム語では sh^lam になるが、Levy の辞典によると次のように説明される。すなわち、sh^lam は、動詞では sh^lem の形であって、第一義としては vollendet, vollkommen, vollständig sein, vollends, ganz dahin sein, verstreichen の意味である。その第二義が freundlich, freundschaftlich leben となっている。名詞としての sh^lam は第一義として, Unversehrtheit, Heil, Wohl, Wohlbefinden の意味であり、その第二義が Friede, Freundschaft と解されている。これらの語は、いずれも、戦争がない状態、争いのない状態、あるいは、内面の平安と言うようなことよりも、本来的には、完全や健全を作り出す努力を意味していた⁽¹⁾。

1. Richardson, A Theological Word Book of The Bible, p. 165. "Peace" の項より引用すると。Shalom is a comprehensive word, covering the manifold relationships of daily life, and expressing the ideal state of life in Israel. Fundamental meaning is totality (the adjective *shalem* is translated *whole*), 'well-being', 'harmony', with stress on material prosperity untouched by violence or misfortune.

Pedersen, Israel Vol I-II. pp. 263-335. the untrammelled, free growth of soul (i. e. person).....harmonious community; the soul can only expand in conjunction with other souls.....harmony, agreement, psychic community...every form of happiness and free expansion, but the kernel of it is the community with others, the foundation of life.

これに反してギリシャ語の *eirēnē* はすでに述べたように、消極的な概念をもっている。それ故に、LXX を読むとき、われわれはギリシャ語の *eirēnē* の背後にヒブル語の shalom のあることを相当程度意識して理解せねばならぬ。Kittel, Th. W. N. T. の中で、Foerster は次のように言う。

Liegt in *eirēnē* hauptsächlich das Moment des Zustandes der Ruhe, so in shalom das des Wohlbefindens, des „Heil“ Seins. Da nun LXX fast alle shalom-Stellen des AT und nur sie mit *eirēnē* übersetzt hat, ist dadurch in das griechische Wort der hebräische Inhalt eingedrungen. Der dadurch

von der LXX geschaffene Sprachgebrauch hat nun nicht nur auf die ersten christlichen Gemeinden griechischer Zunge eingewirkt, sondern hat auch veranlasst, dass eirēnē sich mit dem Inhalt des neuhebräischen bzw aramäischen shalom füllte.

eirēnē は Liddell-Scott の辞典によると、次のように説明されている。すなわち peace,……ep' eirēnēs in time of peace,……hence later, a peace, treaty of peace,……そして、人の安否を向う場合に eirēnē を用いるのは Hebraism であるとの辞典ははっきりと明記する。さらに、Kittel, ThWNT によると Foerster は eirēnē を次のように説明する。すなわち、

Grundlegend für den griechischen eirēnē-Begriff ist, dass dieses Wort primär weder ein Verhältnis zwischen mehreren noch ein Verhalten, sondern einen Zustand bezeichnet: die Friedenszeit, der Friedenszustand, ursprünglich nur als Unterbrechung des ewigen Kriegszustandes aufgefasst.

ここで Foerster はギリシャ語の eirēnē とラテン語の pax とかよく似ていることを認めながらも、両者を幾分区別して、次のように述べる。

Während das lateinische pax⁽¹⁾ „zunächst der beide Teilnehmer berücksichtigende Ausdruck für ein wechselseitiges Rechtsverhältnis“ ist, bezeichnet eirēnē „zunächst nichts anders……als den triebhaft bejahten, sinnlich geführten, greifbaren Gegensatz des polemos.⁽²⁾

1. ラテン語の pax は Lewis によると、元来 pac, pag, pacisco, pango など言う動詞に由来し、an agreement, contract, treaty, を意味し、その結果として peace すなわち戦争状態にあった二つの者が和解した状態の意味になったと説明する。pax はフランス語の paix や英語の peace などとも関連するが、Peace も Oxford によると、Freedom from, or cessation of, war or hostility の意味であったと説明する。これに反して、ドイツ語の Friede(n) は元来 Freund や英語の friend と関係があって、遠くはサンスクリットの pri に由来する。pri は to please, gladden, delight,……to like, love, be kind to などの意味で、古い Saxon 語の fri にも関連する。それで Kluge は Friede(n) を pri から解釈して Zustand der Freundschaft, Schonung と書いている。それ故、同じヨーロッパ語であっても、pax の系統の paix や peace と、Friede とではその本来の意味は相違していた。

2. polemos は「戦斗」の意味。

新約聖書に eirēnē なる語は、90回ほど用いられているが、その個所は以下のごとくである。

マタイ10章12. 13. 13. 34. 34.

マルコ 5章34.

ルカ 1章79. 2章14. 29. 7章50. 8章48. 10章5. 6. 6. 11章21. 12章51. 14章32. 19章38. 19章42.

ヨハネ 14章27. 27. 16章33. 20章19. 21. 26.

使徒行 7章26. 9章31. 10章36. 12章20. 15章33. 16章36. 24章2.

ロマ 1章7. 2章10. 3章17. 5章1. 8章6. 14章17. 19. 15章13. 33. 16章20.

Ⅰ コリ 1章3. 7章15. 14章33. 16章11.

Ⅱ コリ 1章2. 13章11.

ガラ 1章3. 5章22. 6章16.

エペ 1章2. 2章14. 15. 17. 17. 4章3. 6章15. 23.

ピリ 1章2. 4章7. 9.

コロ 1章2. 3章15.

Ⅰ テサ 1章1. 5章3. 23.

Ⅱ テサ 1章2. 3章16.

Ⅰ テモ 1章2.

Ⅱ テモ 1章2. 2章22.

ビレ 3.

ヘブ 7章2. 11章31. 12章14. 13章20.

ヤコ 2章16. 3章18.

Ⅰ ペテ 1章2. 3章11. 5章14.

Ⅱ ペテ 1章2. 3章14.

Ⅱ ヨハ 3.

Ⅱ ヨハ 15.

ユダ 2.

黙示 6章4.

以上のような *eirēnē* を、ラテン語訳はペテロ第一書 5章14をただ一個所 *gratia* と訳したのを例外としてはほかはことごとく *pax* と訳した。*eirēnē* と *pax* とのそれぞれの意味については、すでに註のところで説明を試みたが、要するに、その文字の表面にはヒブル語の *shalom* やアラム語の *shēlam* が姿を消したことになる。ヨーロッパ諸国の言葉に新約聖書が訳されたとき、この *eirēnē* はほとんど機械的に「平和」と訳されたであろう。ただ、邦訳において、それはかなり多くの語に解釈されて自由に訳された。たとえ

ば口語訳によると、その語は次のように訳されている。

「平和」39回 (マタ10:34. 34. ルカ1:79. 2:14. 12:51. 19:38. 19:42. 使徒10:36. 24:2. ロマ3:17. 5:1. 14:17. 19. 15:33. 16:20. 【コリ7:15. 14:33. 【コリ13:11. ガラ5:22. 6:16. エペ2:14. 15. 17. 17. 4:3. 6:15. ピリ4:9. コロ3:15. 【テサ5:3. 23. 【テサ3:16. 【テモ2:22. ヘブ7:2. 13:20. ヤコ3:18. 18. 【ペテ3:11. 黙示6:4.)

これと大同小異の意味をもつ語としては、

「和解」1回 (使徒12:20)

「仲裁」一回 (使徒7:26)

「和」1回 (ルカ14:32)

「相和」1回 (ヘブル12:14)

「おだやか」1回 (ヘブ11:31)

以上を合計すると44回になる。

次に「平和」を精神的に、心の内剛の「平安」と訳した箇所は34回ある

(マタ10:12. 13. 13. ルカ10:5. 6. ヨハ14:27. 27. 16:33. 使徒9:31. 15:33. ロマ1:7. 2:10. 8:6. 15:13. 【コリ1:3. 【コリ1:2. ガラ1:3. エペ1:2. 6:23. ピリ1:2. 4:7. コロ1:2. 【テサ1:1. 【テサ1:2. 【テモ1:2. 【テモ1:2. ピレ3. 【ペテ1:2. 5:14. 【ペテ1:2. 【ヨハ3. 【ヨハ15. ユダ2) これに大体同じような内容の語がいくつかある。すなわち、「安らか」7回 (ルカ2:29. ヨハ20:19. 21. 26. 【コリ16:11. ヤコ2:16. 【ペテ3:14)「安心」3回 (マル5:34. ルカ7:50. 8:48)

「安全」1回 (ルカ11:21)

「無事」1回 (使徒16:36)

以上を合計すると46回となる。これによって判断すると口語訳は新約聖書にある *eirēnē* の半数を、その内容をいかに理解するかは別として、「平和」と訳し、ほかの半数を「平安」と訳している。これが、ほかのヨーロッパ語であれば、これらの一切を *peace* とか、*paix* とか、あるいは *Friede(n)* と訳している。

新約聖書における *eirēnē* は、ラテン語訳において、ほとんどすべて *pax* と訳され、それ以後ヨーロッパでは *peace* とか *paix* とか *Friede(n)* とか訳されたが、紀元400年代から100年以上かかってシリア語に訳された

Peshitta なる訳を見ると、ギリシャ語の *eirēnē* はこの訳では言うまでもなく、ヒブル語の *shalom* とまったく同じ系統の *sh'lam* なる語に訳された。ところが、ギリシャ語原典では *eirēnē* なる語が用いられてない個所でも *sh'lam* が用いられている。その例をいくつか拾って見たい。

マタイ23:7の *asposmos* (あいさつ)

マルコ15:18の *chaire* (ばんざい)

ルカ1:29の *asposmos*

ルカ1:40の *asposmos*

ルカ23:36 *chaire* (ただし普通の Peshitta の text にはこの語は見出されない)

Ⅱ コリ13:13の *charis* (めぐみ)

コロサイ4:18の *asposmos*

Peshitta は言うまでもなく、ギリシャ語新約聖書からのシリヤ訳であるから、ギリシャ語原典の用法に相当程度まで制約を受けているが、それにもかかわらず、アラム語の姉妹語であるので、折りに触れて *semitism* の表現をわずかながら復元していると考えられる個所がいくらかある。*eirēnē* 以外の語をも *sh'lam* と訳したのは、そのわずかの例であろう。

ZŌĒ

使徒行伝3章15に口語訳では「いのちの君」(*ho archēgos tēs zōēs*)⁽¹⁾ と訳されている語がある。

1. これはいろいろに訳されている。ラテン訳の *auctor...vitae* にしたがって AV や TEV などは *the author of life* と訳したが、Luther, Menge などは *der Fürst des Lebens* とした。口語訳は AV などよりはむしろ Luther, 訳に近い訳し方であろう。Menge の括弧内は *der Führer zum Leben* であり、NEB は *he who has led the way to life* と訳した。

zōē なるギリシャ語に検討を加える場合古代語研究に多く用いられる一つの方法としてその動詞の形から検討を始め、その後名詞の形のものを取り上げたい。*zōē* を動詞の形に直せば *zēn* である。Liddell によると、*zēn* とは次のようにその第一義が規定されている。すなわち、"*prop. of animal life, live, Hom. etc; also of plants,……arist. EN……; of livingmen, Od……; それ故に zēn はなによりも動物が「生きる」意味での「生きる」ことを意味し、植物や人間の場合にもそのまま用いられた、*とすることになる。そこで、これを総括して表現するならば、Th WNT において Bultmann が次の

ように書きあらわしたようなことになろう。すなわち, Zōē (zēn) bezeichnet im griechischen *die physische Lebendigkeit der organischen Wesen, der Tiere und Menschen, aber auch der Pflanzen.* (Bd II. S. 833). それで, ギリシャ思想における zēn の用法は, その第一義としては, 今日の言葉を用いれば「自然科学的な概念」によって扱えられることがらである。(前掲書 835頁参照。) ギリシャ語の用法として, 「生きる」(zēn) とは, 人間の身体あるいは肉体において「生きる」ことである。プラトンの考え方によると, 人間は魂と肉体とにおいて生きると言う二元論的な生き方があるが, それにしても, 生きることは自然的な事実であって, 人間が本来的に具備している条件において, ほかの何者にも依存しないで, 生きることである。(前掲書, 838頁—839頁参照。)

ギリシャ語の zēn をラテン語に訳せば, vivere であってフランス語では vivre となる (Dauzat. 参照。) Lewis によると, vivere は元来サンスクリットの giv. などに由来すると言う。それはギリシャ語の bios, ドイツ語の quicken, 英語の quick (「早い」の意味ではなくて, 「生きている」の意味であるが), などとも関連する。ただし, サンスクリットの場合, giv と書くよりは jiv と書く方が多分正確であろう⁽¹⁾。

1. Williams, A Sanscrit-English Dictionary p. 422. jiv……to live, be, or remain alive.

ギリシャ語の zēn やラテン語の vivere を live, leven, vivre などと訳出することはまことに正確である。なぜならば, それらの語はインド・ヨーロッパ系の言葉として, いずれも, 「生存する」の意味, ことに肉体において「生きる」の意味であるからである。Leben と bleiben と Leib とが互いに関連していることはそれをよく示しているであろう⁽¹⁾。

1. Kluge によると, *Leben*……germ. Durativ zum unter *bleiben* behandelten st.……Verwandte s. u. *Leib*.

Leib……Leben weisen auf germ. *Liba-*, zur Wg. *Lip-* in *bleiben*.
などと説明されている。

また Oxford によると Live なる語について次のように書かれている。

Teut, root *lib*, to remain, continue. さらに同書で Life を見ると次のようになっている。The general meaning of the root (Indo. Eur. *leip*, *loip*, *lip*) is to continue, last, endure;

zēn は, LXX において, 主としてヒブル語の ḥayah⁽¹⁾ のギリシャ語訳である。

1. ḥ はドイツ語の ch のごとき音をあらわして, 単なる h と明確に区別したい。

ḥayah は Köhler の辞典によって単純に理解すれば、am Leben sein とか am Leben bleiben の意味であろう。創世 5 章 3. 出エジ 1 章 16. イザヤ 55 章 3 などを参照。しかし、ḥayah を Gesenius の辞典によって、語源的に検討すると、それはバビロニア・アッシリア系の語ではなくて、むしろアラビヤ語その他と近い関係にあるセム語である。それによると、ḥayah は本来、何物かの前にわれわれがでたときに感ずる「緊張」を意味する。それが、なんらかの危険に直面して全身の筋肉を緊張させることでもあり、また、畏敬すべき人の前で身を硬直させることでもあり、または心の非常な緊張でもある⁽¹⁾。全身を緊張させる (sich zusammenziehen と Gesenius は表現する) ことがはなはだしくなると全身が曲るので、ḥayah に近い語で、ḥiveh や ḥivyah と言うような語があって、それは、曲った者、すなわち「蛇」を意味する。また、ḥayah なる動詞から変化した名詞に ḥay なる語がある (ḥay は一般にはヒブル語で「生命」であるが、それと同一語源に属しながら別の意味の ḥay がある)。それは「群れ」と、詩篇 68 篇 10, 74 篇 19, 68 篇 30, その他で訳されている。それは人間が sich zusammenziehen した結果できた「群れ」である。

1. Allmen, Vocabulary of the Bible, p. 232. "……the concept of life is that of movement and action in Semitic languages the verb *live* (ḥayah) seems to have originally the sense of a muscular contraction, by contrast with the word for death of which the verbal root signifies to be extended or relaxed. Life is then a tension of the whole being, animated by a power which reveals itself in movement. It consists not in the passive neutral fact of existence, but in the presence of a active energy which moves man and impels him to act……to live means not merely to exist in the ordinary sense of the word, but rather to be restored to life, to live again or to survive, in cases where weakness, illness and death were overcoming a living being."

ḥayah なる動詞が、単に「生存する」ことのみを意味するものでなく、非常に多岐にわたる内容をもっていることは、後世の翻譯がこれをいかに表現したかによって、なによりもよく立証される。そこで、第一に、現行の口語訳によって ḥayah の訳語を拾って見たい。いささか順序不同であるが、口語訳は次のように二十数個の異なった語を用いている。すなわち、「生かす」「生き返える」「生き残る」「生き延びる」「生きる」「命を助ける」「命を保つ」「暮す」「元気づく」「死を免れる」「助かる」「直る」「ながらえる」「なる」「万歳」「世を渡る」「新たにする」「生かす」「命を救う」「飼う」「栄え

る」「育てる」「助ける」「繕う」「残す」その他である。その中で圧倒的に多く用いられているのは、言うまでもなく、「生きる」である。二十数種の訳語の中で特に注意を払うべきものを以下に示したい。

「死を免れる」 エレミヤ21章9・38章2・

「命を救う」 エゼキエル3章18・13章22・創世19章19・47章25・

「助かる」 創世12章13・42章18・エレミヤ38章2・列王Ⅰ20章32・列王Ⅱ7章4・

「直る」 列王Ⅱ1章2・8章8・9・10・10・14・20章7・イザヤ38章9・

「栄える」 ホセア6章2・

ḥayah の意味が、現行口語訳に比較的正確に訳出されているから、以上の例を示したのではなく、単に、ḥayah を「生きる」なる語一つに統一することがいかに不可能であったかを示すためである。ḥayah は、人間の自然的状態において、人間が本来的に、「生きる」ことを意味するのみならず、「死を免れ」「命を救うて」「助かり」肉体の病氣も「直り」精神的にも物質的にも「栄える」ことを意味する⁽¹⁾。

1. 「生命の木」創世2章9・3章22・箴言3章18・「生命の道」詩篇16篇11・「生命の源」詩篇36篇11・「生命の書」詩篇89篇29・「生ける者の地」ヨブ28章13・「生命の光」詩篇56篇14・などにおける「生命」は神によって与えられた繁栄と幸福と平和とを意味する。なお詩篇103篇3-5を参照。

ヒブル語の「生命」をあらわす ḥayyim について Kittel, ThWNT, Bd II SS 844 f に述べられている文章を引用して筆者の論が独断でないことを立証したい。

Das at.liche ḥayyim umspannt als Begriff sich den Bedeutungsumfang wie unsern Leben; ḥayyim bezeichnet nur das physische, organische Leben, und zwar meist als den Inbegriff der ineinander greifenden Lebenskräfte und Lebenserscheinungen. Der Begriff bedeutet aber gleichwohl für den Hebräer viel mehr als die objektive Feststellung einer naturhaften Tatsache; er umschliesst nämlich zugleich im geradezu emphatisches Werturteil, und zwar wenigen in sofern, als das Leben die erste Voraussetzung aller Güter und alles Wertstrebens ist, sondern der Besitz des Lebens an sich wird im ganzen AT als ein durch nichts relativierbares Gut, ja als das höchste Gut empfunden. Alttestamentliches Leben ist weithin geradezu ein Wort für glück.

さらにこの著者は同じ書物 SS. 850-851 において次のような結論的な文章を書いている。

Das Phänomen des natürlichen Lebens, dessen subjekt primär den Mensch ist, ist im AT nicht zum Gegenstand beobachtender und reflektierender Wissenschaft gemacht und nicht primär als Phänomen der Natur aufgefasst worden. Es ist das Sein, das der Mensch selbst ist, und zwar zunächst zeitlichen Sein.

ヒブル語旧約聖書がギリシャ語に訳されたとき, *hayah* は次のようなさまざまなギリシャ語に訳された。その使用回数にしたがって次に掲げたい。

zēn (to live) 圧倒的によく使用され, その回数は算えなかった。

zōē (Life) 26回 [Gen 1 : 30. 45 : 5. Jd 6 : 4. 17 : 10. IV K 8 : 10. 14.

Jb 33 : 22. 28. 36 : 14. Ps 142(143) : 3. Is 57 : 15. Ez 1 : 20. 21. 3 : 21. 7 : 13. 10 : 17. 16 : 6. 18 : 9. 13. 17. 19. 21. 28. 33 : 13. 15. 37 : 5]

zōon (living) 14回 [Gen 1 : 21. Ps 67(68) : 10. 103(104) : 25. Hb 3 : 2.

Ez 1 : 5. 13. 14. 15. 19. 22. 3 : 13. 10 : 15. 20. 47 : 9]

zōogonein (to make alive, quicken) 11回 [Ex 1 : 17. 18. 22. Le 11 : 47. 47. Jd 8 : 19. I K 2 : 6. 27 : 9. 11. III K 21(20) : 31. IV K 7 : 4]

Peripoiein (to preserve) 11回 [Gen 12 : 12. Ex 1 : 16. 22 : 18(17). 32 : 14. Nu 22 : 33. Josh 6 : 16(17). 9 : 20. II K 12 : 3. III K 18 : 5. Ez 13 : 18. 19]

Sozein (to save from death, keep alive) 5回 [Gen 47 : 25. Es 4 : 11. Ps 29(30) : 3. Pr 15 : 27. Ez 33 : 12]

Diatrephein (to breed up, support) 4回 [Gen 7 : 3. 50 : 20. Ps 32(33) : 19]

Ektrephein (to bring up from childhood, rear up) 3回 (Gen 45 : 7. II K 12 : 3. Za 10 : 9]

Hyugiazein (make sound, heal) 3回 [Josh 5 : 8. IV K 20 : 7. Hos 6 : 3 (2)]

以下は回数が少ないので省略する。

ついでながら, *Vulg* において *hayah* は圧倒的に多く *vivere* と訳されているが, それ以外にいくつかの訳語を採用している。その中で *salvere* (これは必ずしも厳密に *to save* の意味ではなくて, むしろ広義に用いられ *to be well, to be in good health* の意味に用いられていることが多いのである

が) が以下のように15回用いられている。Gen 7 : 3. 12 : 19. 12 : 34. 19 : 19. 19 : 34. 47 : 25. 50 : 20. Josh 2 : 13. II Sam 16 : 16. 16 : 16. I Ki 18 : 5. 20 : 31. Job 36 : 6. Jer 38 : 17. Ps 30 : 3(4).

ところが, Vulg の影響を相当程度強く受けたと一般に理解されている AV において, ḥayah は次のような語に訳されている。

keep alive, leave alive, make alive.

certainly.

give life (9回) promise life. (9回)

let live, suffer to live.

nourish up.

preserve (1回)

quicken.

recover, repair, restore,

revive.

save (25回位)

surely, be whole.

以上の中で, “save” は以下の個所に用いられていて, Vulg の *salvere* よりその回数が多いことには注目すべきである。

Gen 12 : 12. 45 : 7. 50 : 20. Ex 1 : 22. Deut 20 : 16. Josh 2 : 13. I Sam 10 : 24. I K 1 : 25. 1 : 34. 1 : 39. 18 : 5. II K 7 : 4. 11 : 12. II Ch 23 : 11. Ez 3 : 18. 13 : 18. 13 : 19. 18 : 27. Ex 1 : 17. Nu 22 : 33. Josh 7 : 2. 8 : 19. I Sam 27 : 11. Gen 19 : 19.

ḥayah が単に to live の意味ではなくて特に神との関係においては, 神よりの祝福を示す場合が非常に多いが, それにもかかわらず, LXX—Vulg—Luther—AV—RV—RSV—口語訳と言う翻訳の伝統において依然として, *zēn*—*vivere*—*Leben*—*live*—生きる, という語が圧倒的に多く使用されている。それで, 新約聖書に大きな影響を与えた旧約聖書ハバク 7 書 2 章 4 がいかに訳されているかを示し, 次にロマ書 1 章 17 の訳を示して見たい。

ここで注意を払いたいことは「生きる」と言う語の未来形に対して, ハバク 7 書の場合 Menge が *wird das Leben haben* と特に訳したことと, ロマ書の場合 Stage が *wird Leben empfangen* と, XXth Century N. T. が *shall find Life* と, NEB が *shall gain life* と訳したことである。それは, 単に

Hab 2 : 4

Heb	v° tsadik	b°emunatho	yih°yeh
Syr	v° zadika	b°haimanuta	nihe
LXX	ho de dikaios	ek pisteōs mou	zēsetai
Vulg	justus autem	in fide sua	vivet
Douay	but the just	in his faith	shall live
Luther	der Gerechte aber	seines Glaubens	wird leben
AV	But the just	by his faith	shall live
RV	but the righteous	by his faith	shall live
RSV	but the righteous	by his faith	shall live
Menge	der Gerechte aber	in folge seines treuen Fest haltens	<i>wird des Leben haben</i>
Zürch	der Gerechte aber	kraft seiner Treue	wird am Leben bleiben
Jerus	mais le juste	par sa fidélité	vivra
Cramp	mais le juste	par sa fidélité	vivra
Moff	the good man	as he is faithful	lasts and lives
Goodsp	But the righteous	by reason of his faithfulness	lives

Rom 1 : 17

Grk	ho de dikaios	ek pisteōs	zēsetai
Peshitta	d°kiza	mēn haimnutah	niheh
Vulg	justus autem	ex fide	vivit
Douay	The just man	by faith	liveth
Beza	Qui vero	ex fide justus est,	vivit
Luther	Der Gerechte	aus Glaubens	wird leben
AV	The just	by faith	shall live
RV	But the righteous	by faith	shall live
RSV	He who is righteous	through faith	shall live
Menge	der Gerechte	aus Glauben	wird leben
Zürch	der Gerechte aber	aus Glauben	wird leben
Stage	der Gerechte	durch Glauben	<i>wird Leben empfangen</i>
Weitz	der Gerechte aber	aus Glauben	wird leben
Jerus	Le juste	de la foi	vivra
Cramp	Qui est juste	par la foi	vivra
Moff	the righteous	by faith	shall live
XXCent	the righteous man	through faith	<i>shall find Life</i>
Weym	the righteous man	by faith	shall live
NEB	he who is justified	through faith	<i>shall gain life</i>
TEV	He who is put right with God	through faith	shall live
Phillips	the righteous	by faith	shall live

shall live ではあらわし得ない、救済論的な内容をいくらかでも表現しようとしているように見える。

口語訳の新約聖書において、zēn (生きる) なるギリシャ語は、以下のような語に訳されている。すなわち、「生かす」「生き返える」「生き残る」「生きる」「生ける」「一生涯」「いのちを得る」「生涯」「住む」「生活する」「生者」「生存」「助かる」「日を過ごす」「身を持ちくずす」。その中で、「生き返える」は八回用いられている(マタイ9章18。ルカ15章32。使徒9章41。20章12。ロマ14章9。黙示2章8。20章4。5)。「たすかる」なる訳は三回用いられている(マルコ5章23。ヨハネ4章50。51)。「いのちを得る」なるより訳語はわずか一回しかない(ルカ10章28)。

名詞としての zōē (生命) なる語は、口語訳では以下のような語に訳されている。すなわち、「生きかえる」「生き物」「生きる」「命」「生」「生活」「生前」「生命」である。その中で「生きかえる」なる語は、幾分「救い」に近い感じを与えるが、「生命」が「救い」と訳された箇所は一つもない。しかし、NEB によると、ルカ15章33で放蕩息子が救われたときの状態を、“has come back to life” と訳した。TEV はそこを単に “now he is alive” と訳したのみであって、この点では NEB の方が TEV よりすぐれている。またヨハネ11章25を TEV は単に “he will live” と訳すが、NEB は “he shall come to life” と訳す。そこでも NEB の方がまさっている⁽¹⁾。

1. Pedersen, Israel I-II p. 152. “And life is not an abstract colourless something, which forms the basis of the souls, not mere existence without any qualities……”

This application of the word ‘life’, ‘live’ and ‘made living’ is not a special, isolated use of the word, so that ḥayyim partly meant life, partly recovering. It always means life, but the Israelitic conception of life is such that in certain cases it must cover the idea of recovery.

新約聖書ギリシャ語の zōē または zēn は、Vulg においては、まったく機械的に、vita または vivere と訳された。しかし、Vulg より幾分おくれで東方でシリア語に訳された Peshitta において次のようなことが起きた。すなわち、zōē や zēn はシリア語の「生命」に当る ḥayye や、「生きる」に当る ḥya に例外なく訳された。ḥayye や ḥya がヒブル語の ḥai や ḥayah に由来することは言うまでもない。ところが、ヒブル語の ḥai や ḥayah に「生命」や「生きる」よりも広い意味があったことはいままで繰り返し説明したとおりであるが、これがアラム語になるとヒブル語よりわずかにその意

味の範囲が広がる。そして、それがシリア語になると驚くほど意味が広がる。

Peshitta において、ギリシャ語の *sōtēria* (救い) に相当する語を検討して見ると次のようなことが判明した。

sōtēria は以下のように新約聖書に45回位用いられている。

ルカ 1 章69. 71. 77. 19章 9.

ヨハ 4 章22.

使徒 4 章12. 7 章25. 13章26. 13章47. 16章17. 27章34.

ロマ 1 章16. 10章 1. 10章10. 11章11. 13章11.

Ⅱ コリ 1 章 6. 6 章 2. 6 章 2. 7 章10.

エペ 1 章13.

ピリ 1 章19. 1 章28. 2 章12.

Ⅰ テサ 5 章 8. 5 章 9.

Ⅱ テサ 2 章13.

Ⅱ テモ 2 章10. 3 章15.

ヘブ 1 章14. 2 章 3. 2 章10. 5 章 9. 6 章 9. 9 章28. 11章 7.

Ⅰ ペテ 1 章 5. 1 章 9. 1 章10. 2 章 2.

Ⅱ ペテ 3 章15.

ユダ 3.

黙示 7 章10. 12章10. 19章 1.

以上の中で、ルカ 1 章69. 71. 黙示 7 章10. 19章 1 の 4 個所に「贖い」または「救出」を意味する *purkana* およびその動詞の形が用いられているのみで、ほかの41箇所は「生命」と普通訳される *hayye* がそのまま「救い」の意味に使用されている⁽¹⁾。

1. Jennings, Syriac NT Lexicon. p. 74. *hya*, was alive, lived; was preserved, saved, Joh 4:51.……This verb in Peal is the NT equivalent of Grk *sōthēnai*;……Thus (spiritual) life and salvation in Syriac usage are identified. *hayye*, life, salvation, Rom 13:11. *hayyeda laha*, the salvation of God. Luke 3:6.

sōtēria ときわめて近似した語である *sōterion* または *sōtērios* なる語がギリシャ語新約聖書に次のごとく 5 回用いられている。

ルカ 2 章30. 3 章 6.

使徒 28章28.

エペ 6 章17.

テト 2 章11.

その中で ḥayye およびその動詞から変化した形の語が用いられているのは、ルカ 3 章 6 とテト 2 章11であって、ほかの 3 箇所は、前出の *purkana* (使徒28章28. エペ 6 章17) と *ḥnana*——恵み、あわれみ、好意の意味——(ルカ 2 章30) である。

ギリシャ語新約聖書において *sōzein* (救う) なる動詞は以下のごとくに 60回以上用いられている。すなわち、

マタ 1 章21. 8 章25. 9 章21. 9 章22. 10章22. 14章30. 24章13. 24章22. 27章40. 27章49.

マル 3 章 4. 5 章23. 5 章28. 5 章34. 6 章56. 8 章35. 10章26. 10章52. 13章13. 13章20. 15章31. 16章16.

ルカ 6 章 9. 8 章12. 8 章36. 8 章48. 8 章50. 9 章24. 13章23. 17章19. 18章26. 18章42. 19章10. 23章35.

ヨハ 3 章17. 5 章34. 10章 9. 11章12. 12章27. 12章47.

使徒 2 章21. 2 章40. 2 章47. 4 章 9. 4 章12. 11章14. 14章 9. 15章 1. 15章11. 16章30. 27章20. 27章31.

ロマ 5 章 9. 5 章10. 8 章24. 9 章27. 10章 9. 11章14. 11章26.

【コリ 1 章18. 1 章21. 3 章15. 5 章 5. 7 章16. 7 章16. 9 章22. 10章33. 15章 2.

Ⅱコリ 2 章15.

エペ 2 章 5. 2 章 8.

【テサ 2 章16.

Ⅱテサ 2 章10.

【テモ 1 章15. 2 章 4. 2 章15. 4 章16.

Ⅱテモ 1 章 9. 4 章18.

テト 3 章 5.

ヤコ 1 章21. 2 章14. 4 章12. 5 章15. 5 章20.

【ペテ 3 章21. 4 章18.

ユダ 5. 23.

以上の中でシリヤ語の「生きる」に相当する *ḥya* を使用していない箇所は以下の13箇所のみである。

pazi (救い出す) マタ 8 章25. 27章40. ヨハ 12章27. ロマ 5 章 9.

asi (完全に) マタ 9 章21. 使徒 4 章 9.

prak (救う) マタ14章30. エペ2章8. ユダ5.

hlam (医す) ヨハ11章12. ヤコ5章15.

shavzeb (救出する) 【コリ3章15.

ユダ23のギリシャ語原典には写本に問題があるようで、sōzein に相当する語を正確に拾うことができなかった。

新約聖書ギリシャ語の sōzein の86パーセントが Peshitta において「生きる」と訳されていることは、十分に注意を払うに価いすることである。前述したように、ヒブル語において、hayah がシリヤ語の hya におけるように明確に sōzein の意味に使用されていることはそれほど多くないように見えるが、それにしても Peshitta の用法を相当重大な意味のあることを指摘しているように思われる。

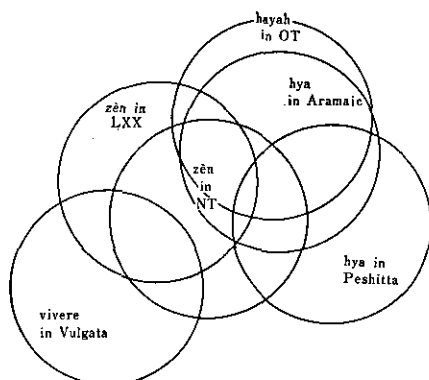
新約聖書がギリシャ語で書かれたとき、そのギリシャ語は半ばセム語の翻訳のような意味をもっていた。少なくとも、機械的に言うのではなく、広義においてであるが、その背後に LXX があった。それは LXX の用法がそのまま新約聖書に持ち込まれた、と断定する意味ではない。

新約聖書が書かれたころ、その読者たちはギリシャ語の背後にある程度までセム語のニュアンスを読み取れたであろう。しかし、紀元400年ごろともなり、それが Vulg となったころ、セム語のニュアンスは一般の読者には理解されなくなり、他方、ギリシャ、ローマの哲学思想によって、聖書をその角度から読みなれたとき、聖書本来の意味とはある程度まで違った方向に、一種の屈折が起きたと考えられよう⁽¹⁾。それを今日もう一度修正する手段としてセム語系統の聖書が使用されてしかるべきである。

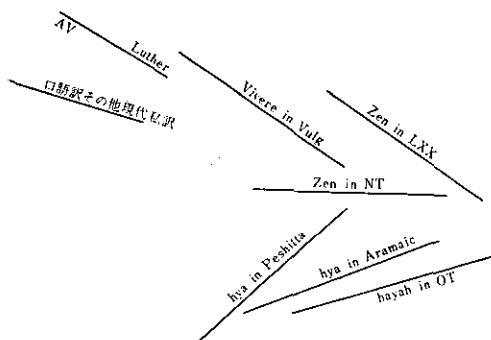
1. 紀元2世紀の教父の作の中にてでくるものを参考にすれば、そのことは明白である。たとえば、イグナチオスの「エペソ書11章1. および17章1などにでくる zēn の用法には終末論的な基調が見られるが、他方、同じ手紙の20章2などで聖餐のエレメントを「不死の薬」などと呼んでいる個所での zēn の用法はかなりギリシャ的な意味であろう。

新約聖書訳語がもしも幾分でも屈折したとするならば、これを正確に図式であらわすことはまったく不可能であるが、十分に不十分であることを知りながらも、多少理解を助ける意味で次のような図を引いて見た。もとより不完全なものである。

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について (2)



「生きる」なる語の領域を示す円形



屈折の度を示す線

The latter half (5-8) is devoted to the study of images of the Jewish relationship to the Christian world. Representations of the Jews' sufferings, of their exiles, of Shapiro's views of Christian churches, and of his social criticism are taken up.

Death and Life of *The Red Pony*

Ikuzo TANAKA

Studying Steinbeck's works which were written in California, we detect one major motif: glorification of life. To study his view of life, I have selected *The Red Pony*, which, I think, indicates the motif most simply and clearly. *The Red Pony* consists of four stories. Each of them has its own theme and together they make up one design. I have tried to see each theme and the relationships.

Two Aspects of *The Winter's Tale*

Shozo TAKAHASHI

There are two aspects in life. One is the aspect of darkness and the other brightness. In this play, these are well matched and each individually developed in the various experiences of life.

Leontes' jealousy, representing the greatest problem of the human mind, shows the aspect of darkness. In his malice, we find some much significance, such as Sin and Death, and Nothing and Justice. The symbolism of Perdita, Hermione's grace, and Autolycus' humour show aspects of brightness, such as love unchangeable in distress, purity and sincerity of human nature, and a firm determination to overcome human vices.

In this play, Shakespeare shows the most malicious mind and despicable deeds, and at the same time he skillfully describes the most graceful.

Studies in the Refraction Found in New Testament Translations

Kunio KATO

Presupposing the necessity of thorough study of the Old Testament, the writer tries to find 'refraction' in such as Latin, French, German, and English.

Then reading through the Syriac Version, (the Peshitta,) the writer

seeks another kind of refraction, since Syriac belongs to a different group of Semitic languages. Through this search, he comes to believe, in some cases he can restore the original meanings of New Testament words.

Following a previous treatise on *aeon* (age), *nomos* (law), *metanoia* (repentance), *thanatos* (death), *mnemeion* (tomb), *egeirein* (to raise up), the writer here discusses linguistic and biblico-theological meanings of words such as *eirēnē* (peace) and *zōē* (life) used in the New Testament.